日本初の金オプション
東工取 5月17日にザラバ方式で

東京工業品取引所は5月17日、金先物オプション取引を開始した。日本ではこれまでとうもろこし、大豆、粗糖の先物オプション取引が行われているが、いずれも板寄せ方式であり、ザラバ方式のオプション取引は日本で初めて。

当日は8時10分から東工取ビル3階のトレーディングルームで関係者が集まって修祓式を行った後、9時15分、中澤忠義理事長が取引開始のボタンを押して、取引がスタートした。初日の出来高はご祝儀も手伝ってコールオプションが1、556枚、プットオプションが1、766枚、合計3、322枚と東工取の予想の1・7倍弱に達した。

先物オプション取引は1990年の商品取引所法改正で商品先物取引の一つとして認められた取引。世界では活発な取引が行われており、昨年の出来高はFIA（米国先物取引協会）の調べでは61億4222万枚とそれ以外の先物取引の出来高合計29億7、044万枚の2倍以上に達し、先物取引の主流になっている。

金でもNYMEX（ニューヨーク・マーカンタイル取引所）では2003年に先物取引の出来高の35・2％に達している。それだけに「国際水準の商品取引所を目指す」東工取としてはその取引開始は悲願になっていた。

中澤忠義東京工業品取引所理事長の話　金オプション取引の推移を分析し、石油市場にも導入を検討したい。先物オプション取引は先物市場の経済的機能を一層、発揮し、市場の国際化に対応していくうえで、革新的変化をもたらす契機となることを期待している。

海外玉、東工取で躍進
東穀取では伸び悩み

商品取引所法改正の大きな理由の一つが「国際的な市場間競争の激化」に対応すること。そこで、海外玉の動向をみると、東京工業品取引所で目覚ましい伸びをみせている。今後も増え続ける見込み。一方、東京穀物商品取引所では伸び悩んでいる。

2003年の東工取の海外玉は取引高（売買枚数）でみて、前年の300万枚台から一気に大台を更新して584万枚台と前年比50％も伸びた。枚数トップの金が倍増し、2位のガソリンが48％増、3位のゴムは横ばいだったが、灯油が71％増え、銀、白金、原油も20％台の伸び。全体として、この4年間で4・5倍、7年間で8倍に成長している。金と石油製品の伸びが目立ち、ゴムも引き続き健闘している。

国別では英領を含むイギリスが2000年以降、第1位の座を占め、海外玉全体に占める比率は32～60％と大きい。2位以下の順位は年によって変動しているが、オーストラリア、アメリカ、シンガポール、香港などが常連。

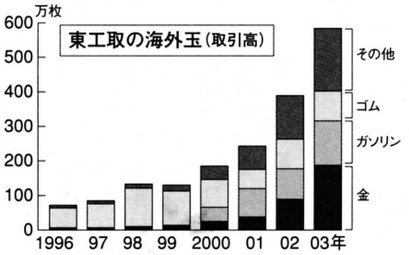
平成15年度（15年4月～16年3月）の委託玉のうち、上場10商品平均で11％を海外玉が占めるようになっている。ゴムの委託玉の18％、金の17％、原油の12％が海外からの注文だ。

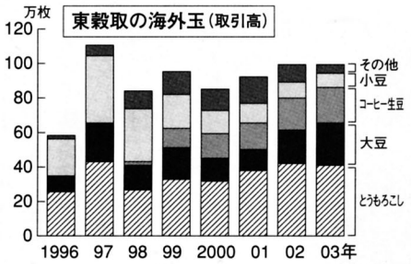
クリアリングハウスの整備、ISV（1台の端末から、世界の多くの取引所にリアルタイムでアクセスできる電子取引ソフト提供業者）の参入促進、金先物オプション取引の開始などによって今後も海外玉は増え続ける見通し。

東穀取の03年の海外玉は97万枚で前年と変わらなかった。1997年に小豆の取引高が膨らんで、100万枚を超えたが、その後は、その大台を超えていない。

そうした中で、国別では03年にオーストラリアが前年の6倍に激増、全海外玉の半分近くを占め、それまで1位を続けていた香港を大きく追い抜いた。

商品別では、コーヒー生豆、大豆が着実に伸びているが、とうもろこしは横ばい、小豆は減少の一途。当面は全体として伸び悩みが続くとみられている。





先物協会

懸賞論文の表彰式・講演会開く

先物協会は、5月31日、東京穀物商品取引所2階大会議室で「商品先物取引に係る懸賞論文」の表彰式と講演会を開催した。（受賞者及び受賞論文の概要については先月号で既報）

初めに、先物協会の二家勝明会長が、「商品先物業界では平成5年より研究調査助成金制度を実施してきた。今回、新たな試みとして広く一般を対象に『懸賞論文』を募集した。学術的研究を支援する事業は長く継続することにその意義があり、長期的には、市場規模の一層の拡大、商品取引所法の目的である国民経済の適切な運営に必ずや資するものであると考えている」と挨拶した。

続いて6名の審査委員を代表して花輪俊哉審査委員長（一橋大学名誉教授）が審査基準（国民経済上の意義、論理の明確さ、新規性・創造性、学問的水準）に基づき審査委員が厳正な審査を行ったこと及び各受賞論文についての講評を述べた。

二家会長からの賞状授与の後、最優秀賞の家森信善氏（名古屋大学大学院教授）は、「日本経済の構造改革昨今の経済情勢等により研究資金の確保が厳しくなっている中、先物協会の研究支援事業は有意義であり、有り難い。新しい研究を始めるきっかけとなる」と、また、優秀賞の柴田慎一氏（三晃商事法務調査資料室次長）は、「若い外務員をはじめ業界全体の方々に誇りを持ってもらいたい」と、佳作の中野聖子さん（一橋大学大学院博士課程）は、「これからも商品先物の研究を続けていきたい」と挨拶した。

表彰式に引き続き、最優秀賞の家森教授が、「日本経済の構造改革と商品先物市場に期待される役割」と題して講演を行い、来場者は熱心に聞き入っていた。

▲家森教授の講演

▲3人の受賞者（右から家森氏、柴田氏、中野氏）

先物協会

学んでから、はじめる 商品先物なっとくスクール

「セミナー」から「スクール」へ。先物協会の「商品先物なっとくスクール」が5月29日（東京・六本木フォーラム）からスタートした。

昨年度開催した「商品なっとくセミナー」でのアンケート結果などを踏まえて、実際の取引に役立つ情報習得の場にするのが狙いで、主な対象は商品先物をやったことがない予備軍の投資家と、商品先物を始めてもっと勉強したいと考えている〝わかばマーク〟投資家。

講師にチャート分析などで知られる新井邦広氏（トレンドライン代表）を起用、投資家壇上に呼んでインタビューも行う。

日程は7月10日大阪（マイドームおおさか）、9月11日名古屋（テレピアホール）、11月27日福岡（イムズホール）、2005年1月22日東京（六本木フォーラム）。